資料４

大山崎町地域福祉計画・自殺対策計画策定のためのワークショップ
（ワークショップ結果報告）

・開催日時：令和４年 11 月 11 日　９時 30 分～11 時 30 分
・参加者の所属団体：大山崎ボランティア連絡協議会（３名）、大山崎町知的障害者育成会（１名）、スマイルプレイス（１名）、助け愛隊サークル（２名）、大山崎町民生児童委員協議会（３名）　計 10 名
・事務局：健康福祉部（向井、浅田、瀬川、山本、松田）
・地域社会研究所：４名
・ワークショップの方法
「ワールドカフェ」方式により、参加者を３グループに分け、３つのテーマについて各グループで意見交換を行った。

テーマ①：大山崎町の「いいところ」「気になるところ」

大山崎町の「いいところ」として、ＪＲや阪急など鉄道の利便性や歴史・文化的風土、自然などの住環境の良さに加え、子育てしやすい環境や若者世代の活躍について意見が集まりました。地域の人びとの関わりや緑豊かな環境の中で子どもがのびのびと育つことができる、安心・安全なまちが本町の魅力と言えます。

一方、「気になるところ」として、町内の移動（特にバスの利用）の利便性については課題が見受けられます。また、自治会加入者の減少により、住民同士のつながりが希薄になっており、ご近所との連携をとりにくい状況にあるとの意見が集まりました。地域福祉の推進の基盤となる住民同士のつながりづくりが大きな課題となっています。

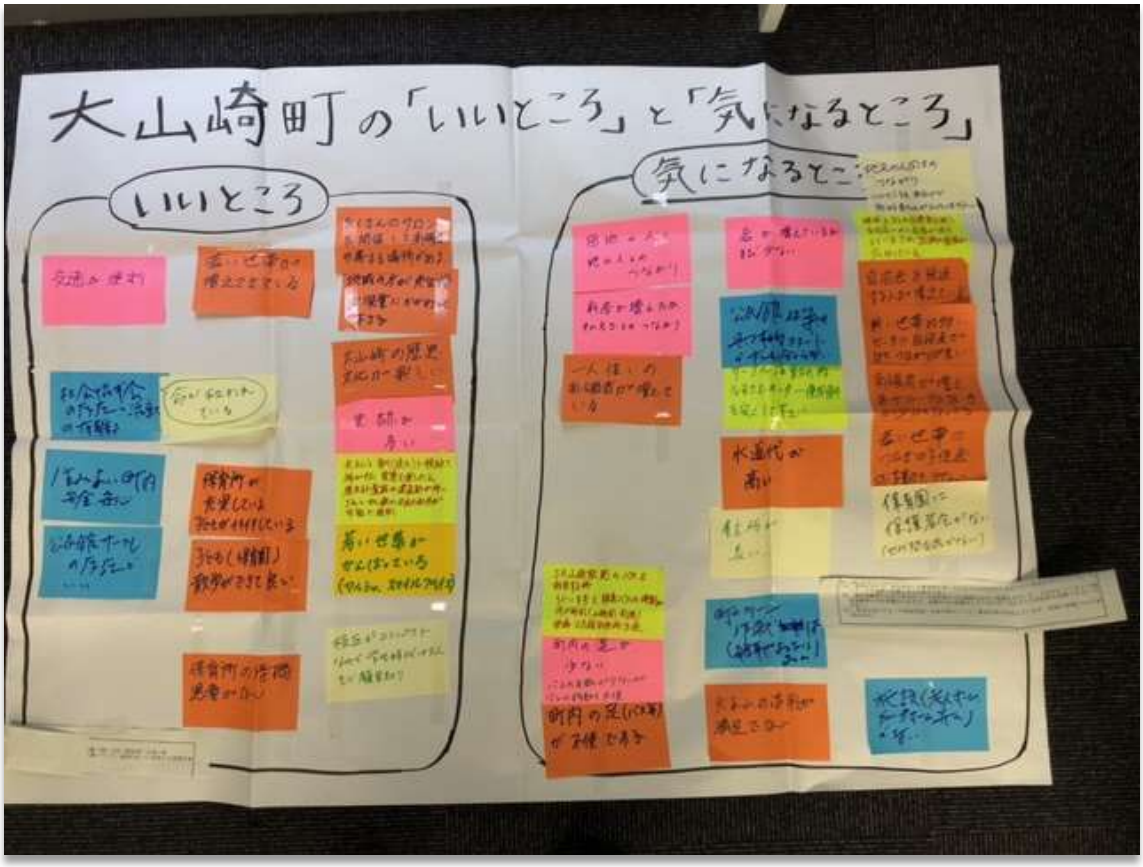
＜いいところ＞

・交通が便利
・社会福祉協議会の存在と活動の有難さ
・住みよい町内　安全、安心←命が救われている
・公民館サークルの存在がいい
・若い世帯が増えてきている
・保育所が充実している。子どもがイキイキしている
・子ども（保育園）散歩ができて良い
・保育所の待機児童がない
・たくさんのサロンを開催して高齢者の集まる場所がある
・地域の方が先生役で児童にかかわって下さる
・大山崎の歴史文化が楽しい
・史跡が多い
・天王山と桂川（淀川）に挟まれて緑が多く散策を楽しめる。歴史的遺跡や建造物が多い
・JR と私鉄の両方の利用が可能で便利
・若い世代ががんばっている（マルシェ、スマイルプレイス）
・校区がコンパクトなので学生時代→大人まで顔見知り

＜気になるところ＞

・団地の人と地の人のつながり
・新居が増えたがその方々とのつながり
・一人住いの高齢者が増えている
・JR 山崎発のバスを利用する時、うぐいす号と阪急バスの時刻が同じ時間（２時間間隔）役場・公民館利用時不便
・町内の足が少ない　バスの本数が少ないので少しの移動も不便

・町内の足（バス等）が不便である
・店は増えているがまだ少ない
・公民館改築の具体的スタートが少しも分からない
・サークル活動の時ふるさとセンター使用料を安くしてください
・水道代が高い
・住所が長い・・・
・町のクリーン作戦は（雑草や落ちている品々）
・天王山の活用が満足でない
・地元の人同士のつながり　いいところもあるけど外から来た人が入っていきづらい・・・
・地域をまとめる役割を担う自治会への入会者が減少しているため近隣の連携が少なくなっている。
・自治会を脱退する人が増えている
・新しい世代の多いところに自治会がなくつながりが貧しい
・高齢者が増え各グループの担い手が少なくなっている
・若い世帯のつなぎの子供会の活動も少ない
・保育園に保護者会がない（世代間交流がない）
・施設（老人ホーム、グループホーム）がない



テーマ②：コロナ禍の地域福祉活動や近所づきあいの現状

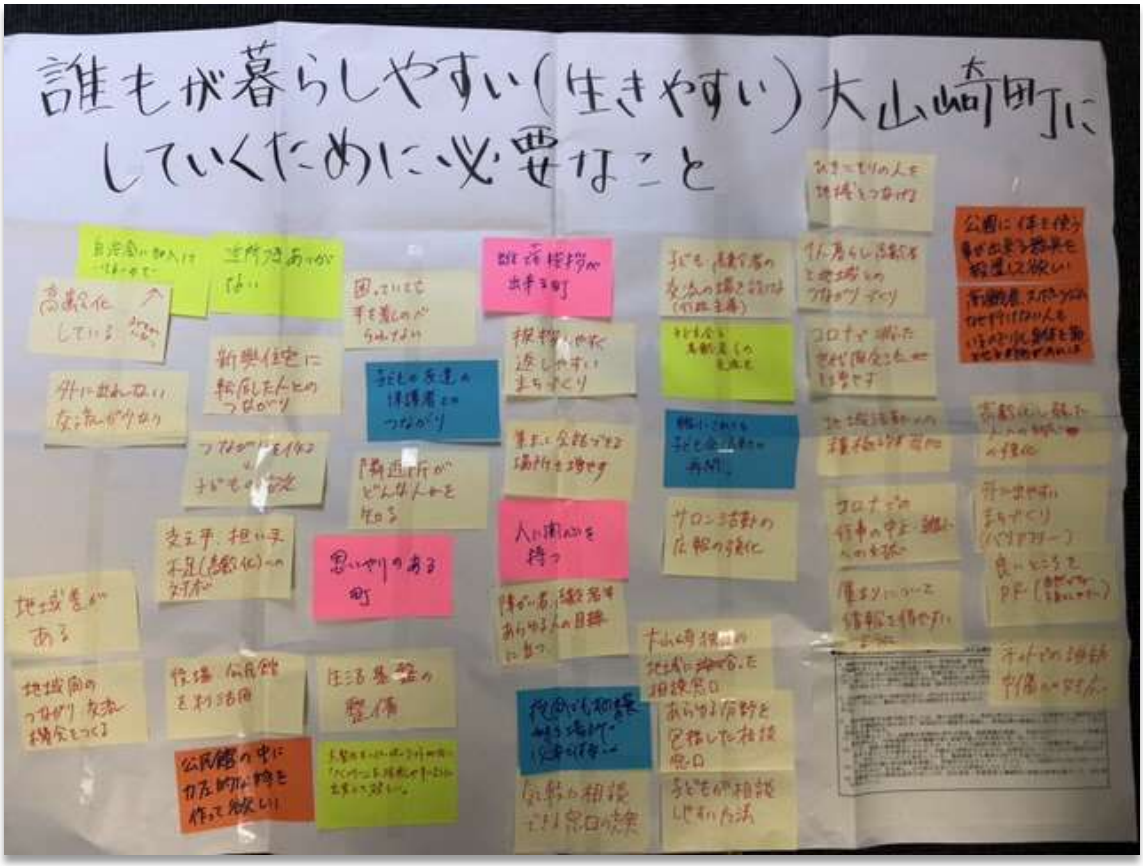
コロナ禍により、数年にわたって地域活動が中止になったり、近所づきあい等の住民同士の交流も減少したりしている様子がうかがえます。近所付き合いについては以前より減少傾向にあったという声も上がっており、コロナ禍で住民同士のつながりについての課題がより顕在化したとも言えます。また、全国的にはコロナ禍をきっかけとしてインターネットサービスやＳＮＳを活用したコミュニケーションが活発になっていますが、ＳＮＳ等に不慣れな方もおり、新しい生活様式を踏まえながらも従来の対面でのコミュニケーションや見守りを維持していく工夫が必要です。

・おひとり様との付合い方
・高齢化のため自治会の活動ができない
・就園前の子育て　月２回、ヨガ　パパ話　人数制限、子供
・助け愛隊、コロナで中止
・要約筆記対面のため中止
・障がい者運動会中止（コロナ）
・旅行など行けていない
・高齢者向けサロン、２年間開催できず
・高齢者ボランティア　訪問コロナで中止　再開しはじめた
・敬老会、ことぶき会の会食は３年間中止になっている。
・育成会の行事はすべて中止
・町民運動会コロナで中止
・近所づきあいが減った（コロナ前から）
・高齢者なので敢えて会への参加を控える自粛生活を実行している。
・傾聴ボランティア活動者は減っている　維持が課題
・食材　移動スーパーで買いに来る人がコミュニケーション
・ラインや SNS も使えない人が多い　携帯がない
・ラインや SNS の活用増加
・サークル「たけのこ」はふるさとセンターで地域交流を毎月続けている　介護予防体操も実施している。
・子供の姿をみかけない
・聞こえない人の権利が周知されていない
・活動にあたり人数制限等工夫して実施
・今週隣人と会ってない
・亡くなってもわからない
・ボランティア会高齢者不足

・自治会減少で近所づきあいがない
・自治会の必要性は
・町内会話しの機会がない（会費集めのとき）
・訪問（高齢）もできない
・民生児童委員　ＳＮＳ活用
・会員が減っている
・公園、グラウンドでの交流があるところもある
・親同士の顔が見にくい（学童に入っていると情報共有しやすい）
・防災会は入ってもらう
・自治会を抜ける
・朝の活動（道路に立って）（コロナでも）
・小物作り（高齢者）
・民生委員　訪問はできている

テーマ③：誰もが暮らしやすい（生きやすい）大山崎町にしていくために必要なこと

誰もが暮らしやすい（生きやすい）まちにしていくために、住民同士のつながりづくりが求められており、そのことはテーマ①・②にも同様に表れています。普段の挨拶やご近所との会話を通して互いに関心と思いやりのあるまちを築くことや、子どもから高齢者まで年齢や障がいの有無等を超え、多様な住民同士の交流の場や交流の機会づくりを推進していくことが大切です。また、いつでも気軽に相談できる窓口の充実も求められています。コロナ禍により地域活動は縮小傾向にあり、活動再開を支援したり、参加を促進するような取組も必要です。

・自治会に加入していないので←高齢化している　子どもがいない
・近所つきあいがない
・外に出れない　交流が少ない
・新興住宅に転居した人とのつながり
・つながりを作る→子どもの安定
・支え手・受け手（高齢化）不足への対応
・困っていても手を差し伸べられない
・隣近所がどんな人かを知る
・誰とでも挨拶ができる町
・挨拶しやすく返しやすいまちづくり
・集まって会話できる場所を増やす
・人に関心を持つ
・思いやりのある町
・障がい者・高齢者等、あらゆる人の目線に立つ
・子どもの友達の保護者とのつながり
・子ども・高齢者の交流の場を設ける（行政主導）
・子ども会と高齢者の交流を
・縮小されてる子ども会活動の再開
・サロン活動の広報の強化
・引きこもりの人を地域とつなげる
・１人暮らし高齢者と地域とのつながりづくり
・コロナで減った世代間交流を増やす
・地域活動への積極的な参加
・コロナでの行事の中止・縮小への対応
・集まりについて情報を増やしやすいように
・夜間でも相談出来る場所が必要ではないか

・大山崎独自の地域に合った相談窓口
・あらゆる分野を包括した相談窓口
・気軽に相談できる窓口の充実
・子どもが相談しやすい方法
・地域差がある
・地域間のつながり・交流機会をつくる
・役場・公民館を利活用
・公民館の中にカフェ的なものを作って欲しい
・生活基盤の整備
・大型のスーパーマーケットがない　「ベンリー」を活用しやすいように充実して欲しい。
・公園に体を使う事ができる器具を設置して欲しい
・高齢者スポーツジムなど行けない人もいるので身体を動かせることができれば
・高齢化し弱った人への対策の強化
・外に出やすいまちづくり（バリアフリー）
・良いところを PR（自然が多い　子育てしやすい）
・ネットでの誹謗中傷への対応